

「四月のある晴れた朝に 100 パーセントの女の子と出会うことについて」読書会(2021. 7. 10)
レポート集

■「現実、体験、物語—村上春樹「四月のある晴れた朝に 100 パーセントの女の子に出会うことについて」を読む— 佐野之人さん

この風変わりな長いタイトルを持った小説は、実質的には「恋について」と呼ばれるべき物語である。前半は事実として起こったことであり、その意味で「現実」と言える。これに対し後半は「僕」の頭の中の空想であり、その意味で「物語」と言える。人間は「日常」が「現実」であると思い、自分は現実を生きていると思っている。しかし実は説明のできない体験の上を生き、それが瞬間突如として人間を襲う。この時現実が現実のままに非現実となり、日常が非日常となる。恋がまさしくそうしたものである。そのことを示すのが冒頭の一文だ。

四月のある晴れた朝、原宿の裏通りで僕は 100 パーセントの女の子とすれ違う。

これで一段落であり、体験の突如さと完結性を表している。爾後の展開はこの体験を開いたものと言っても過言ではない。そのことは「四月のある晴れた朝に 100 パーセントの女の子に出会うことについて」という風変わりなタイトルが示しているように思われる。すなわち爾後の詳説の全体がこの体験に「ついて」述べられたものなのである。ただしタイトルでは「出会う」となっているのが、この第一段落では「すれ違う」となっていることに注意したい。この点については後で述べる。

「四月のある晴れた朝、原宿の裏通りで女の子とすれ違う」のはもちろん現実であり日常である。しかしそれが「100 パーセントの女の子」となると、それはもはや現実ではないし、まして日常ではありえない。

女の子に限らず「出会い」はいつも 100 パーセントだ。「出会い」自体に 50 パーセントも 75 パーセントもあり得ない。ところが恋に限らず現実・日常の関係は常に 100 パーセントではない。我々は 100 パーセントの三角形や美を肉眼では見たことはない。こうした現実・日常を一挙に破る体験が人間の身に起り得る、そのことをこの第一段落は示している。何の前触れもなく突如として語り出す語り口が体験の直接性を示している。

続く前半の、さらにその前半部分では、この体験「について」、それがどういう体験であるかが語られる。この「100 パーセント」にはどこがどうだからといった一切の条件が付かない。またそれを具体的にこうこうであると限定（「タイプファイ」）することもできないし、そういう仕方では「思い出す」こともできない。

「僕」はその体験を「誰か」に話すが、彼は「100 パーセントの女の子」ということをありきたりにしか理解することができない。〈ありきたり〉、それが我々の現実的・日常的な思考の在り方であるが、そうした在り方にとっては、体験はどこまでも「不思議（変）なもの」である。

前半部の後半部分は、彼女と出会ってからすれ違うまでの「僕」の心の動きを含めた経緯が述

べられている。「僕」は彼女との、肉体的にも精神的にも、あるいはそうした区別以前の合一を希う。物語を論ずる部分である後半部では、そうした究極の願いが「結婚」という言葉で言い表されている。恋は性愛に限らず、そうした完全な合一を究極の目的とする。知への愛という名を持った「哲学(philosophia)」も本質的に恋(エロース)である。それどころか宗教や芸術を含め、あらゆる人間的な営みが恋(エロース)であると言ってよい。「有る(存在する)」、「生きる」、「善」ないし「よく生きる」、「美」、「真理」、「人間」等が、まさにそれであるところのもの(イデア)との合一を人間は願って止まない。しかもそうしたものとの合一は性愛がそうであるように、抽象的一般的な概念との合一ではない。かといってそれに対立する特殊個別的な合一(それも抽象的概念的な合一である)でもない。今・ここに成立するものでありながら、永遠不変であるような、そうした合一である。プラトンはかつてそうした哲学の営みを肉体から魂を切り離すこととして「死の練習」と呼んだ。それは同時に「魂の浄化」に他ならない。もちろんこれも肉体から切り離されて魂がそれだけで存在するとイメージすれば、それはすでに肉体的な捉えであり、生と切り離された死を想っても同様である。

さてこのように、恋は合一を希うものであるが、その中でも「僕」が「何よりも、一九八一年の四月のある晴れた朝に、我々が原宿の裏通りですれ違うに至った運命の経緯のようなものを解き明かしてみたい」と言っていることに注目したい。そこには「平和な時代の古い機械のような温かい秘密が充ちているに違いない」とされている。この「時代」は過去を思わせるが、この過去が14年前(「昔々」)の出来事であり、「運命の経緯」の解明と「暖かい秘密」が後半で述べられる「物語」に他ならないことが後に明らかとなる。ただここでも注目したいのは、この「物語」も現在「すれ違う」という体験から、その秘密に充ちた体験を「秘密」のままに、解き明かそうとしたものだ、ということである。こうした動機が哲学、宗教、芸術の根本の動機であると考えられる。

こうして「僕」はいわば〈魂の浄化〉を求め、彼女に恋し、合一を求め、「どうなるか分からない、でもどうにかなりたい」という「可能性が僕の心のドアを叩く」。胸は高鳴るのだが、直ちにアプローチすることができない。「さて、僕はいったいどんな風に彼女に話しかければいいのだろうか?」という〈反省〉が頭をもたげる。このことが後に述べられる「十四年前」とは著しい対比を成している。さんざん逡巡した挙句「僕はもう三十二で、結局のところ年を取るというのはそういうことなのだ」と述べる。すなわち〈魂の浄化〉を希いつつ、それをさせないのが「現実」の生身の人間を生きるということ、それが「年を取る」ということではないだろうか。現実の我が身を慮り、「どうしたら」と思いあぐねることしかできない、それが「現実」の我々の姿である。しかしそうした計らいをいくら重ねたところで、本質的に合一に至る道はなく、機を逸する他はない。こうして彼女は「秘密」を内に収めたまま「すれ違」い、「何歩か歩いてから振り返った時、彼女の姿は既に人混みの中に消えていた」。これは永遠の離別を意味するだろう。しかし現実には「すれ違い」であり、永遠の離別であるものが、単にそれだけのものではないことが後半部で明らかになる。

後半部は「もちろん今では、その時彼女に向かってどんな風に話しかけるべきであったのか、僕

にはちゃんとわかっている」と始まる。そうして「その科白は「昔々」で始まり、「悲しい話だと思いませんか」で終わる」とされる。それによれば「昔々」すなわち「十四年前」に二人は「100パーセント自分にぴったりの少女と少年」として「ばったりとめぐり合う」、すなわち「出会」っているというのである。しかし「二人の心をわずかな、ほんのわずかな疑念が横切り、「もう一度だけ試してみ」て、「やはりお互いが100パーセントだったなら、そこですぐに結婚しよう」という約束をして別れる。その後、二人は悪性のインフルエンザにかかって、記憶をすっかり失ってしまう。そうして十四年がたち、「四月のある晴れた朝」、「二人は通りのまんなかですれ違う」ことになる。「失われた記憶の微かな光が二人の心を一瞬照らし出す」が、「彼らの記憶の光は余りに弱く、彼らの（「100パーセントの男（女）の子」だという心の中の：引用者）言葉は十四年前ほど澄んではない」ために、「二人はことばもなくすれ違い、そのまま人混みの中へと消えてしまう」というのである。そうして物語は予告通り「悲しい話だと思いませんか」で終わる。

この物語を読むと、二人は二度出会っていることになる。一度目は「昔々＝十四年前」に、二度目は「四月のある晴れた朝」である。一度目は「出会い」と言えるが、二度目は一見すると単なる「すれ違い」であるように見える。まずは一度目の「出会い」から考察しよう。

一度目の「出会い」は根源的・元初的な出会いである。「昔々」とは時間以前である。「十四年前」という数字に意味はない。我々は性的な愛においても、アイデアへの愛においても根源的・元初的な出会いを経験している。性的な愛についてはプラトンの『饗宴』の中で、アリストファネスが美しい神話を語っている（「アンドロギュノス」）通りであるが、アイデアへの愛もまったく同様である。こうした根源的・元初的な出会いがなければ我々は恋のしようがない。恋とは自分が欠けていることを忍ぶことであるが、欠けていることが分かるためには合一をどこかで知っていなければならない。では我々はそうした合一をどのようにして失うのであろうか。

「二人の心をわずかな、ほんのわずかな疑念が横切る」ことによって、である。「こんなに簡単に夢が実現してしまっただけで良いのだろうか」という「疑念」、これは合一を対象化して疑うことによって起っており、本質的に〈反省〉である。合一体験からの反省の目覚めである。こうした反省や疑念に目覚めると、人間は自分からは二度と元の合一に戻ることはできない。そこで「もう一度だけ試してみよう」ということになる。

しかし他方で、合一（出会い）の体験は二人の心から消えはしない。不変不動である（「しかし本当のことを言えば、試してみる必要なんて何もなかったのだ。彼らは正真正銘の100パーセントの恋人同士だったのだから」）。

その後二人は「悪性のインフルエンザ」にかかり、「昔の記憶をすっかり失くしてしまう」とある。ここも人間ならば、現世において意識として生きる際に、誰も「昔」すなわち合一体験の記憶をすっかり失くしてしまうということであって、「悪性のインフルエンザ」というのはその象徴に過ぎない。しかし「昔の記憶をすっかり失くしてしまう」と言いながら、それが根源的に失われたのではないことは、「四月のある晴れた朝」に、「失われた記憶の微かな光が二人の心を一瞬照らし出す」ことで分かる。失われた記憶を照らす光源が失われた記憶の根柢にあること

を窺わせる。

しかし他方でその光は「あまりに弱い」。そのために元初的に、あるいは表象的には（口説き文句によくあるように）前世で出会っているような懐かしい感じはするのだが、明確にそうだという「澄んだ」言葉を発することができない。ひょっとすると100パーセントの相手ではないかもしれない、そんな疑念が同時に起って来る。こうした確信と疑念の葛藤が恋にはつねに付き纏う。こうして我々は根源的・元初的にはつねに出会っていながら、現実的にはつねに「すれ違う」ことになる。それは結婚していようが変わることはない。恋におけるこうした両面性がタイトルと第一段落の表記の違い（「出会い」と「すれ違い」）に表れているのではないだろうか。

前半部と後半部が終わった後、結語が、再び現実に戻って、これまた冒頭同様一文で「僕は彼女にそんな風に切り出してみるべきであったのだ」と締めくくられている。これはもちろん後半部冒頭の「もちろん今では、その時彼女に向かってどんな風にはなしかけるべきであったのか、僕にはちゃんとわかっている」を受けたものだが、これを単なる後悔、〈後の祭り〉と取ることはできない。そう取るには内容がちぐはぐだからである。もし本当に話しかけているのであれば、話の結末はハッピーエンドを匂わせるものであるはずだからである。実際に話しかけているのに「二人は言葉もなくすれ違い、そのまま人混みの中へと消えてしまう」では如何にも辻褄が合わない。ではどのように解すべきか。

これも現実における「出会い」の端的を述べたものであると考えられる。現実における出会いは、反省・疑念によって曇らされた弱い光のもとに照らされることで生起する。しかしそうした体験の「解き明かし」としての「物語」は、つねにそれが過ぎ去ってから、それを後追いつするしかない、ということである。体験が「秘密」を収めたまま「人混みの中に」、記憶の雑踏の中に「消えてしまう」所から、その体験について言葉を一つひとつ、記憶の底から取り出していく営み、ここにも人は恋の語りを聞くことができるように思われる。

ところで、恋という非日常的な体験は、恋についての物語（解明）を必要とした。しかしその物語を語り終えることで、現実と物語（空想）の位置が逆転していることに気が付く。何故なら物語こそが不可解な体験を解明する根拠となっているからだ。「僕」はおそらくこの物語を単なる空想だとは思っていない。少なくとも象徴的な意味において、現実の本質を解明するものと考えているに違いない。しかしそうであるからと言って「僕」が異常な夢想家ということにはならない。何故なら人間は現実を生きる上でいかなる場合でも「物語」を必要とするからだ。芸術のみならず、宗教もイデオロギー（民主主義も資本主義もイデオロギーである）も物語である。哲学もそれが体系という形をとるにせよ、とらないにせよ、本質的に物語であることを免れない。科学もパラダイムの上に成り立つ物語である。それ故物語は我々の生死の基底を成している。そうした物語が物語として意識されない時、その上に生起するものが現実となり、日常となる。そうしてこうした現実となった日常が非日常的な体験によって破られることを通じて、そこに新たな物語が要求されることになる。こうしたプロセスに終わりというものはない。

この小説の結語と第一段落を結び付ける時、我々はそこに現実と物語が体験を通して相互に転換し合いながらどこまでも深まっていく、そうした人間の在り方が見えてくるように思われるの

である。

■村上文学を「聴く」、 奈原伸雄さん

はじめて読む村上春樹の作品は、『カンガルー日和』に収められた短編。春に、それとも夢の中で、「昔々」「正真正銘の100パーセントの恋人同士だった」二人が、奇妙に「すれ違う」物語。彼らは、結婚を誓ったその年に、悪疫に犯されて、ともに記憶を失う。そして、十数年が過ぎた「一九八一年の四月のある晴れた朝」、原宿の裏通りで「異常接近」したのに、「ことばもなくすれ違い、そのまま人混みの中へと消えてしまう」（「」内は本編からの引用。以下同じ）。

海の向うではイラン・イラク戦争がはじまり、わが経済はバブルが極限に迫ろうとしていた頃、恐れを知らない一国ばかりの「平和な時代」があって、そんな日本に一抹のラブストーリーはあった。それでもその深みには、「古い機械のような温かい秘密が充ちている」。あのとき、「彼らの記憶の光は余りにも弱く」なっているのに、なぜ、すれ違う刹那に、互いに「100パーセント」の「理想的過去」を想起できたのか？ 失意の日が、どうして「とても気持ちの良い四月の朝」でなければいけなかったのか？ それに、彼女が寝ずに書いたという「速達用の」「まだ切手の貼られていない」手紙は、未投函であるのに、何ゆえに、中身の「秘密の全て」が「温かい」のか？ 等々。

《そこで、魂の似すがたを、翼を持った一組の馬と、その手綱をとる翼を持った馭者とが、一体になってはたらく力であるというふうには、思い浮かべよう》（*①）。人間の魂の元型はもと天界に在って、アイデアの世界を目指す神々の行進に付き従う「善悪二頭の馬と一人の馭者」からなる馬車であった。ところが道行きの途上で、三者の連繫にアンバランスが生じ、天の軌道から外れ、地に墜ちて、魂は肉体に宿るようになった。このため、人は地上で「美しいもの」を目にすると、生前天上で見た「美のアイデア」を想起し、それを契機に真善美の真実在に迫るといふ（因みに、彼が本当に美しいと思う理想の彼女は、この世で「美人」である必要はない）。

それにしても、「形而上学的問い」には「神話的な答え」がよく似合う。爾後二千五百年、「時は驚くべき速度で過ぎ去って」、もはや「愛智」も「神託」も、哲学や文学の世界でさえ訝しがられるようになった。だから、少し気の利いた文学者は、十数年前の記憶に量しを入れて、「答えを伏せた問題集」のような物語を書く。本質の核心は、「秘密を包んだ白い角封筒」のブラックボックスの中に意味あり気に韜晦する。これは、屈折した銜いの「悲しい話だと思いませんか」……。

だから、私には小説が読めない。よって、私は村上文学をたゞたゞ「聴く」ことにした。従って、予習はしない。春に、朗々の音声〈おんじょう〉が「気持ちの良い四月の朝」を聞くとき、同じ姓の言霊が、原文の乾いたメタファーに息を吹き、聴く者の音場に千載一遇の「再会」を提案する。そうして、知を愛する心とミュージックのエロースとを《一つにした熱情の中に、生を送った者の魂》（*②）が「ソクラテスの仲介」を買って出て、ディアレクティケー（問答法）を駆使しながら、「古い機械のような温かい秘密」の真相を開封する。

(*❶) 『パイドロス』 246A プラトン著 藤沢令夫訳 岩波文庫

(*❷) 前掲書 249A